禅、生き方 日本的思考に共鳴

越境 新時代 6

座禅、写経体験／生活哲学「生きがい」に感銘

金龍寺で座禅の体験をする外国人観光客（昨年12月17日、東京都台東区で）＝野口哲司撮影

先月中旬、東京都台東区の金龍寺。朝の静けさの中、海外から来た9人が座禅を組んでいた。手を合わせて合掌をすると、並木泰淳住職(43)が警策でやさしく背中をたたく。スペインのホセ・ロドリゲスさん(37)は「本格的な寺で座禅を組んでみたかった。自分を物質的なことから少し切り離せた」と笑う。

外国人向けに禅寺で座禅や写経、茶が体験できるこのプログラムを主催する「ヤトラ」の黄健輔社長によると、月に200～300人が参加。並木住職は「日本人と違い法話への質問が非常に多い。どう答えれば分かりやすく伝わるのかを考えることは、自分にとっても勉強になる」と語る。

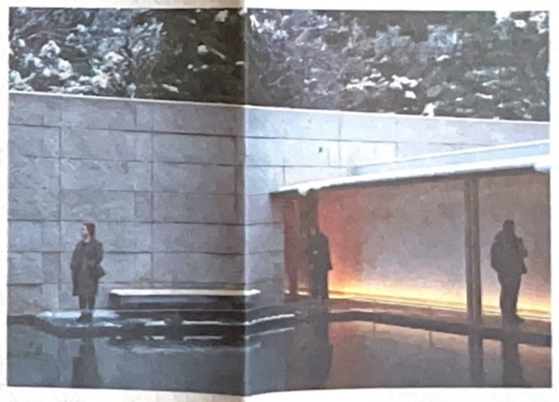
禅の思想を日本文化の象徴として世界に伝えた先駆者が、仏教哲学者の鈴木大拙(1870～1966年)だ。出身地にある「鈴木大拙館」（金沢市）にも外国人の姿が目立つ。雪が舞う先月下旬も、屋外の「水鏡の庭」で思索する人がいた。アルゼンチンから来たミラグロスさん(45)は「熟考することが好きで、実践しようと来た」と話す。

入館者に占める外国人の割合はほぼ右肩上がり。今年度（昨年11月まで）は37・9％、2万人超が外国人だった。猪谷聡学芸員(49)は、滞在時間が長く再訪も多いと指摘。「好きなアーティストが大拙をリスペクトしているから来たという人も多く、カジュアルに興味を持たれている」

禅はなぜ海外で人気なのか。大拙の孫弟子にあたり、仏教学が専門の元東洋大学長の竹村牧男さん(77)は、様々な要因を挙げる。まずは虚飾を排した素朴な美。米アップル社「iPhone」などの背景に、共同創業者のスティーブ・ジョブズが傾倒した禅の美学があることはよく知られる。さらに、言葉にとらわれず、自然と一体の心の中に真理を求める姿勢も大きいという。「大拙は、西洋文化の本質はdivide and rule、分割して支配する立場にあると常に指摘していた。自分と世界、心と物などを分ける考え方が科学を生み、近代文明を発展させたが、東洋はその対立以前を見ているとした。近代に懐疑の目が向けられている今、禅や日本文化に関心が集まるのは当然だ」

竹村牧男さん

猪谷聡さん



外国人も多く訪れる鈴木大拙館（金沢市）

◇

日本的な思考の広がりは、ほかにも。スペイン出身の作家エクトル・ガルシアさん(44)は10年前、「生きがい」という生活哲学を欧米に紹介する共著『IKIGAI』を刊行。70言語に翻訳され、600万部超のベストセラーとなり、日本語版の新版も今月刊行された。「朝、目ざめるための理由が生きがい。ひと言で表す言葉が他にはなく、世界が知っていた方が幸せだと思った」。2004年に来日後、感銘を受けた日本の言葉や価値観を当初はブログで、後に書籍で次々に発信した。一期一会、頑張る、侘び寂び、森林浴――。

「日本は、多くの言葉を輸入する一方で、輸出もたくさんした。禅がマインドフルネスの考えを生んだように、日本のアイデアが世界に影響を与え、鍋のように『ぐるぐる』回って戻ってくるのは、とてもいいこと。日本人は自らの言葉や考え方にもっとプライドを持った方がいい」。ガルシアさんはそう提案する。

モノに感謝し、自らの内面を見つめ直す片づけ法を紹介した『人生がときめく片づけの魔法』（近藤麻理恵著）も世界40か国以上で翻訳され、シリーズ累計1400万部を超えた。

エクトル・ガルシアさんらの共著「IKIGAI」の日本語版

◇

一方、こうした個々の現象にとどまらず、総合的な日本文化論を発信する必要があると、PHP総研主任研究員の大岩央さん(41)は提唱する。世界の知識人に取材する既刊14作の人気シリーズを編集する中で、日本の論壇の議論が海外に伝わっていないと感じ、研究会を結成。『代表的日本人』（内村鑑三）や『茶の本』（岡倉天心）といった、かつてはあった世界水準の日本文化論が、鈴木大拙の一連の著作以降はなくなったことなどを話し合った。23年の提言報告書では、「グローバル言論人」の輩出を訴え、候補者への先行投資が大切だと示した。

大岩央さん

大岩さんは力説する。「生成AIや格差など世界の問題関心が似通ってきた。多少の異論は恐れず、日本とは何かを世界に語りかける言論人が今こそ必要。日本発のナラティブ（物語）が、転換期の世界で存在感を高め、国際社会における日本のソフトパワーを下支えすることにもつながる」

（文化部　小林佑基）

（おわり）